平成 26 年度　Let's びぎんプロジェクト　活動報告書

No.	プロジェクト名	掲載頁
0	（各プロジェクトサマリー）	1-7
1	デート DV free　キャンパスづくりプロジェクト	8-13
2	博物館から海を発信！～大船渡の生態系を子供たちへ～	14-26
3	障害について考えるワークショップ「hanana cafe」	27-31
4	Talk to me in English project	32-38
5	岩手大学　学生フォーミュラプロジェクト	39-41
6	でんでんむしぐるぐる盛岡	42-46
7	放置自転車クリーン＆リユース作戦	47-50

平成 26 年度　Ｌｅｔ'ｓびぎんプロジェクト 活動報告サマリー

プロジェクト名	デート DV free キャンパスづくりプロジェクト～デート DV 対応を知って楽しい岩大にしよう～

【構成員氏名・学部・学年】

代表者　：長谷部大貴(教育3年)

メンバー：加藤　麻衣　（教育2年）
對馬　絵里　（人社4年）
奥崎　静和　（教育3年）
齋藤　　凪　（教育1年）
佐々木映美　（教育4年）
中村　清嵩　（工　4年）
中村　真彩　（教育4年）
萩原真結子　（教育1年）
真嶋　　遊　（工　4年）

【活動の目的】

本活動は岩大生のデート DV に対する認知度を高め理解を深めることを目的とする。そして岩大生が、デート DV のない、よりよい関係性をつくれるようになるとともに、デート DV への具体的な対処方法が分かるようになることを目指す。

【活動の経過・内容】

６月　書籍を使った自主学習会(26日)
７月　パンフレット（2013年度版）増刷
外部講師による研修会「きちんと知っていい恋しよう。―デートDVの知識とその対応―」(19日)
７月～８月
　学内外相談窓口・機関訪問
　岩手大学保健管理センター
　もりおか女性センター、岩手県警察本部
１０月～１月
　パンフレット（２０１４年度版）作成
１月～２月　アンケートの実施
２月　パンフレット（２０１４年度版）お披露目会及び小学習会(13日)

【写真・記録・図表等】

【得られた成果】

2013年度および2014年度にLet'sびぎんプロジェクトの採択を受けた本活動により、本学学生のデートDVへの認知度が高まったかを岩手大学の全学部生に調査するアンケートを実施した。
（実施：2015年１月～２月　対象：岩手大学全学部生　回答人数：452人／男子43.3%　女子55.5%／人社12.6%　教育41.3%　工25.0%　農20.0%）その結果、「デートＤＶという言葉を聞いたことがあるか？」という問いに対する回答は、「ある」が364人（83.5%）、「ない」が66人（15.1%）だった。これは昨年度の同様の質問に対する回答の「ある」60.7%，、「ない」38.2%に比べ、デートＤＶという言葉を聞いたことがある学生が昨年度より大幅に増えていることを示している。

２年間の活動を通して，プロジェクト構成員のデートＤＶへの理解を深めることができた。そして得た知識を基に、２０１３年度・２０１４年度と二つのフリーペーパーを制作し、配布することで岩大生のデートＤＶへの認識や理解度が向上した。 今後は、プロジェクトで制作したパンフレットを活用し、さらに学内でのデート DV 認知度を深めるとともに、被害を受けた学生が一人で悩まずに適切なサポートが受けられるように啓発活動に取り組む。そして、プロジェクト名の通り、学生がデート DV に苦しむことがなく、ないよりよい関係性を築き、楽しいキャンパスライフを送れるような大学の実現を目指していく。

平成 26 年度　Ｌｅｔ’ｓびぎんプロジェクト 活動報告サマリー

プロジェクト名	博物館から海を発信！～大船渡の生態系を子供たちへ～

【構成員氏名・学部・学年】

代表者　：小田嶋　祐希(農　3年)

メンバー：佐藤　拓也　（農　3年）
中野　風子　（農　1年）
鎌塚　祥子　（農　1年）
柳久保萌絵璃　（教育1年）
大石　和樹　（農　3年）
高木場のり子　（人社1年）
中川　裕太　（農　1年）
舛谷　悠祐　（農　3年）
吉田　奈央　（農　3年）
渡辺　悠花　（農　3年）
日下美緒梨　（人社1年）

【活動の目的】

東日本大震災で被災した岩手、宮城、福島の博物館を子ども向けのワークショップの提供で支援するため、ＮＰＯ法人大阪自然史センターが中心となり「東北遠征団」が結成され、沿岸 3 県各地で活動を展開している。この活動は企画から運営まで東北遠征団が行い、これまで岩手大学の学生有志は各地で開催されるイベントに補助スタッフとして赴いてきた。しかし、今後沿岸の博物館の活性化のためには、地元の人材によってイベント等を企画・実施する段階を迎えている。そのきっかけとなるプログラムを東北遠征団と共同で制作・実施することで、必要なノウハウを吸収することを目的に本プロジェクトを企画した。

【活動の経過・内容】

2014年

４月　東北遠征団と打ち合わせ(15日)
大船渡市立博物館との打ち合わせ(16日)

５月　海藻のソーティング (9日)
生物調査(大船渡市綾里湾沿岸)(18～19日)

６月　釜石サテライト訪問(5日)

８月　生物調査２回目(山田町船越南海岸)
(10～11日)

９月　標本作成講座(６日)：岩手大学にて
講師：三橋弘宗氏(兵庫県立人と自然の博物館学芸員)

１２月ワークショップ：盛岡市子ども科学館にて
(20日)　1日に2回実施　参加者11名

2015年

１月　ワークショップ：大船渡市立博物館にて
(18日)　1日に4回実施　参加者34名

【写真・記録・図表等】

【得られた成果】

12月の盛岡市子ども科学館でのワークショップでは、企画書では分からない問題点を洗い出すことができたのが大きな成果だった。特に使用する道具の変更・追加は、1月の大船渡での実践に大変効果的だった。具体的には、子供が扱いやすいように、樹脂を塗る道具を刷毛から木製スプーンに変更する、溶剤が揮発しないよう蓋付きに変える等の改善を行うことができた。

本プロジェクトの集大成となる1月の大船渡市立博物館でのワークショップでは、これまでに経験したことを十分に発揮し、成功したと言える。実施後のアンケートでは参加した子供達や大人の方全員から「満足している」という回答を頂いた。大船渡市立博物館の佐藤館長からも、今後も継続して実施して欲しいというお言葉を頂いた。

本プロジェクトの目的である「東北遠征団と共同で制作・実施することで必要なノウハウを吸収する」事は、これまで東北遠征団が行ってきた現地調査からプログラム開発、実施までワークショップ開催の一連の流れを、本プロジェクトメンバーで実践したことで達成したといえる。実践を通して、使う道具の選定方法や解説書の作り方・魅せ方、当日の運営方法など多岐にわたるスキルを学んだ。このスキルは今後活動を継続していくに当たり大きな糧となるだろう。

平成 26 年度　Ｌｅｔ’ｓびぎんプロジェクト 活動報告サマリー

プロジェクト名	障害について考えるワークショップ hanana cafe

【構成員氏名・学部・学年】

代表者　：阿部　愛美　　（人社　4年）
メンバー：種綿　鼓動　　（教育　4年）
　　斎藤　初珠　　（教育　2年）
　　高橋　穂乃香　（農　　2年）
　　千田　裕海絵　（教育　2年）
　　千葉　優香子　（教育　2年）
　　村田　笑美　　（教育　2年）
　　山内　莉歌　　（農　　1年）

【活動の目的】

①岩手大学生が「障害」や「多様性」について考えるきっかけをつくる。
②その上で学生にとって身近である大学生活をテーマに、様々な人が過ごしやすい大学について考え、学生自らがその実現へ向けてアクションをおこせるようになる。

【活動の経過・内容】

2014年
11月　「STIR cafe」への参加(2日)
　　「第1回hanana communication cafe」
　　開催(30日)　参加者12名
　　テーマ：共通点探し、他人から見た自分
12月　「第2回hanana communication cafe」
　　開催(12日)　参加者12名
　　テーマ：自己理解・他己理解
2015年
1月　　「第3回hanana cafe」開催（13日）
　　岩手大学映画研究会との共催
　　映画：『チョコレートドーナツ』鑑賞
　　およびグループワーク　参加者20名
2月　　「第4回hanana cafe」開催(14日)
　　参加者16名
　　テーマ：発達障害について

【写真・記録・図表等】

【得られた成果】

＜改善点＞企画内容が準備段階で大きく変わることが多く、その点をメンバー間で共有しきれていない部分があった。また、参加者に自分のこととして考えて欲しいとの意図から、「障害」という言葉を敢えて用いずに広報・企画作成をしてワークショップを2回行ったが、自分達の活動の意図が参加者に伝わりにくくなってしまった部分があり、伝えたいことをどのようにアウトプットし、企画を作っていくのか十分に検討していく必要があると感じた。

＜良かった点＞①学生目線での企画ができ、また、参加者もすべて学生であったため、活発なワークショップにすることができた。②結果的に幅のある活動を行ったため、様々な関心を持つ岩大生が参加をしてくれた。参加のきっかけとなる入り口はそれぞれでも、多様な活動全体を通して私たちの活動の意図を伝える機会をつくることができた。③メンバーも参加者も新たな気づきを得た。

活動の明確な成果を測定することは難しいが、答えのないこと、普段は話せないことについて大学生のうちにインプット・アウトプットする機会をつくることは非常に重要である。メンバーの卒業や各々の活動があるため、来年以降の活動は未定であるが、活動継続に関心を示してくれているメンバーや参加者もおり、今年度の流れや反省を踏まえた新たな活動が考えられる。

平成 26 年度　Ｌｅｔ'ｓびぎんプロジェクト 活動報告サマリー

プロジェクト名	Talk to me in English project

【構成員氏名・学部・学年】

代表者　：瀬野　美希（農　2年）

メンバー：

小原　澪(人社3年)	佐藤美紗希(教育3年)
田中綾乃(人社4年)	高橋朝美(人社2年)
尾形芽衣(農　2年)	鈴木千春(農　2年)
小原舞子(人社3年)	須田穂高(農　2年)
一條由佳(人社3年)	伊藤秀平(人社2年)
松倉杏奈(農　3年)	石田宗一郎(工2年)　他

【活動の目的】

ピンバッジを「英語を話したい」という意思表示として用いる。ピンバッジをつけることで、装着している人同士が英語で話すきっかけとし、学内で英語を気軽に話せる環境づくりを目指す。会話の内容は特に指定せず、その人のレベルや状況に応じた内容としている。したがってあいさつ程度でも構わず、あくまで英語を使う機会を増やすことを目的としている。

【活動の経過・内容】

10月　授業前宣伝・SNS（Twitter Facebook LINE）・ポスター掲示によりピンバッジ活動を周知
英語のみでコミュニケーションを行うハロウィンパーティの開催

11月　"English Free Talk Cafe"企画・宣伝期間

12月　"English Free Talk Cafe"を毎週金曜日の18時から図書館ラーニングサポートデスクにて開催。

【写真・記録・図表等】

【得られた成果】

これらの活動を経てもっとも感じたことは、授業前宣伝・SNS・ポスター掲示・口コミ効果によって、「Talk to me in English project」の存在を知っている学生や、ピンバッジを身につけてくれている学生は多くいたが、実際にバッジをつけている人同士で英語での会話をする機会はほとんど見受けられなかったということである。半年間、という期間では「日常生活で」英会話をするということは日本人学生にとって 非常にハードルが高いことなのだと改めて痛感した。英語を使ってもらう機会を増やすためには、イベントの開催が必須である。日本人同士でも可能な限り英語で話そうとチャレンジしやすいような環境にするため、あらかじめ指針を明確に立てておく必要性を感じた。

今後の目標は、これまで週に一度開催していた「English Free Talk Cafe」の開催回数を増やし、多くの学生が参加できるようにすることである。 また、その開催場所を図書館だけではなく、中央・農学部・工学部食堂や、空き教室など、多種多様な場所で行うことで、空いている時間に英語を話すことができるようにする。その光景を他の生徒が目撃したり、また飛び入り参加することで、学内で英語を話すこと・英語を話している光景を見ることに慣れるようにする。

平成 26 年度　Ｌｅｔ'ｓびぎんプロジェクト 活動報告サマリー

プロジェクト名	岩手大学　学生フォーミュラプロジェクト

【構成員氏名・学部・学年】

代表者：山本　暁雅　工　３年
副代表　廣野　義明　工　３年
　　金屋　裕樹　工　３年
　　増田　竣亮　工　M1
　　佐々木　朗　工　研究生
　　笹野　大祐　工　１年
　　小向　渉　工　３年
　　畠山　潤平　工　３年
　　加藤　文弥　工　３年
　　山生　章義　工　３年
　　佐藤　和貴　工　３年

【活動の目的】

本プロジェクトでは、H27 年度学生フォーミュラ大会の出場を目標としている。その中で本年度は、エコランを通じて車両の製作･改良やグループ運営のノウハウを学んでいく。

また、一関高専の澤瀬薫先生に車両の設計・製作についてアドバイスしていただき、設計・製作のノウハウを学ぶ。

さらに SNS 等を通じた活動報告と、これまでの活動を基にしたスポンサー募集活動を行っていく。

【活動の経過・内容】

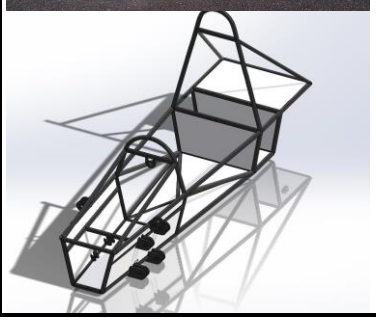
11月
ホンダカーズ盛岡上堂店にて、エコラン車両の展示

一関工業高等専門学校に行き、澤瀬先生に車両についてのアドバイスをいただく(29日)

12月
車両コンセプト決定
車両設計開始

１月
車両の空間配置設計の決定
個別設計開始

【写真・記録・図表等】



【得られた成果】

本年度の「Honda エコマイレッジチャレンジ」は三年目の参加であったが、リタイアという結果になってしまった。前日の練習走行では完走することができ、去年の練習走行の結果よりも記録が少し伸びていたので、去年の車両の改善点を少し修正することができたと考えられる。しかし、車両のメンテナンスを怠っていたために、リタイアしてしまったので、車両の整備体制が悪かったことが反省点としてあげられる。今回のエコランを通して、学生フォーミュラでの車両の製作・改良の基礎やグループ運営のノウハウを身に着けることができたと考えられる。

11 月に一関工業高等専門学校に行き、澤瀬先生にフォーミュラ車両の設計・製作についてのアドバイスをいただき、車両コンセプトの大事さを学ぶことができた。今回のプロジェクトでは、車両コンセプトを決め、フレームの設計まですることはできたが、予定していた年間計画の試験車両を作成することができなかったので、スケジュールの組み立てに問題があったことが反省点としてあげられる。今回の経験を来年度での活動に活かしていきたい。

今後は、「車両の設計・改良」、「自動車関連のセミナー参加」、「他団体との情報共有」などとともに、知識、技術の向上及びスポンサー探しを行っていく。

平成 26 年度　Ｌｅｔ’ｓびぎんプロジェクト 活動報告サマリー

プロジェクト名	「でんでんむしぐるぐる盛岡」プロジェクト

【構成員氏名・学部・学年】

代表者：

阿部　慶太　（農　2年）

メンバー：

太刀川　晴之　（農　2年）
吉田　拳　（人社2年）
吉野　由起　（人社2年）
石井　友美　（工　1年）
笹原　梨那　（工　1年）
平門由佳子　（農　1年）
森　諒平　（農　1年）
齋藤ゆり子　（農　1年）

（まちづくりサークルNPCN）

【活動の目的】

盛岡市内を走る都心循環バス「でんでんむし号」を利用した盛岡の新しい「歩き方」を学生の視点から地域情報誌という形式で発信することによって、観光客や市民など多くの人に実際に足を運んでもらい、まちを盛り上げること。

岩大生にあまり認知されていない盛岡市内の公共交通機関の利用法を紹介すること。

【活動の経過・内容】

（平成26年）

10月

活動開始、全体の企画や計画を立てた。

11月

取材、交渉

12月

取材、記事作成、デザインや編集

（平成27年）

1月

取材、記事作成、文章校正、デザインや編集

入稿、納品　（発行部数：7,000部）

2月

配布設置、反省会

【写真・記録・図表等】

【得られた成果】

5,000 部ほどを取材先や盛岡市内各地の観光案内所やバスセンター等に設置した。手に取っていただいた方から好評をいただいている。スケールは盛岡市内のでんでんむし号の移動範囲に限定することでバランスよく様々な魅力的なものをまとめ、いろいろな方に手に取ってもらえた。

今回の活動はサークルの 3 年生がいなくなってから、1、2 年生の 9 人として初めての活動であった。未熟ながら情報誌を全 45 ページに及ぶ冊子という形式で作るという目標を達成できたことに大きく満足している。取材の中で盛岡市民と触れ合うことでまちと私たちの距離が縮まり、楽しく活動ができたのもよかった。

反省点としては、全体計画の詰めが甘く入稿直前まで作業をしてしまったこと、ネットを活用した広報の不足、メンバー内の役割分担がうまくいかなかった点が挙げられる。

活動をしていくことでサークル、個人共に成長することができたいい機会となったので、反省点は今後の活動に活かしていき、よりよいものにつながると思う。

今後の計画については、サークル内で話し合って決めていきたい。

平成 26 年度　Ｌｅｔ’ｓびぎんプロジェクト 活動報告サマリー

プロジェクト名	放置自転車クリーン＆リユース作戦

【構成員氏名・学部・学年】
代表者：吉田　拳　　（人社2年）
副代表　紫葉　隆則　（農　2年）
　　村上　央樹　（工　4年）
　　斉藤　量平　（工　4年）
　　白岩　卓也　（工　2年）

【活動の目的】
　大学構内の放置自転車がゼロの状態を達成、継続させ、美しく機能的な岩手大学を取り戻す。同時に、岩手大学生の環境意識とマナーの向上を図る。
　当初の数値目標
（ア）　2015 年冬までに自転車リユース 10 台以上。
（イ）　2016 年前期の放置自転車回収時に、放置自転車 50 台未満。

【活動の経過・内容】
9月
プロジェクト採択
盛岡東警察署と連絡を取る

10月
盛岡東警察署生活安全課と大学を交えての話し合い
（防犯登録解除は、持ち主から委任を受けた学生が代理可能であることを教わる ）

11月
計画の見直し

12月
工学部東側の放置自転車回収
防犯登録番号、車体番号の調査、作成した一覧を盛岡東警察署生活安全課へ提出

【写真・記録・図表等】

【得られた成果】
　レッツびぎんプロジェクト期間中に自転車処分簡易化制度と自転車リユースの制度を稼働させたかったのですが、できませんでした。放置自転車を回収・修理した上で希望者へ販売し、その資金で次の修理代等をまかなう持続可能なシステムを構想していましたが、法的な問題からそれが出来ないことが分かり計画の変更を余儀なくされました。見通しが甘く、法的な問題に気づかないまま動いていたのが、主な原因です。本企画は失敗ということになると思います。
　しかしながら、盛岡東警察署生活安全課さんとのつながりや自転車、防犯登録に関する知識を得たり、放置自転車回収の際の動きを体感できたりしたことは無駄ではなかったと思います。私たちはこれを活かし、新しく放置自転車対策の企画を立てたいと考えています。
　今後は、自転車処分簡易化制度とリユース自転車の貸し出し制度の案を作り、大学当局に提案し、大学の取り組みとして採用してもらう形で放置自転車の減少に寄与していきます。また、私たちの団体の立ち位置は、制度稼働後に運用の一部を担い、また制度自体の改善提案を行うようなサークルになる見込みです。

H26 年度 Let's びぎんプロジェクト

実施結果報告書

プロジェクト名：

デート DV free キャンパスづくりプロジェクト

～デート DV 対応を知って楽しい岩大にしよう～

1．構成員氏名・学部・学科

No.	氏名	学部	学科課程	学年	備　考 （役職担当等）
1	長谷部　大　貴	教育学部	生涯教育課程	3	代表
2	加　藤　麻　衣	教育学部	芸術文化課程	2	副代表
3	對　島　絵　理	人文社会科学部	国際文化課程	4	副代表
4	奥　崎　静　和	教育学部	生涯教育課程	3	
5	齋　藤　　凪	教育学部	生涯教育課程	1	
6	佐々木　映　美	教育学部	生涯教育課程	4	書記
7	中　村　清　嵩	工学部	社会環境工学科	4	会計
8	中　村　真　彩	教育学部	生涯教育課程	4	会計
9	萩　原　真結子	教育学部	芸術文化課程	1	
10	真　嶋　　遊	工学部	社会環境工学科	4	書記

２．活動目的

本活動は岩大生のデート DV に対する認知度を高め理解を深めることを目的とする。そして岩大生が、デート DV のないよりよい関係性をつくれるようになるとともに、デート DV への具体的な対処方法が分かるようになることを目指す。

３．活動の経過・内容

（１）パンフレット（２０１３年度版）増刷

①目　的

岩大生がデート DV への理解を深め、認知度を高めること

②内　容

２５００部増刷し学内外で配布している（継続中)。

③成　果

学内外から反響をいただいており、今後も配布することができる。

（２）書籍を使った自主学習会（６月２６日）

①目　的

2014 年度版パンフレット制作のため DV 及びデート DV への知識を深めること

②日　時

２０１４年６月２６日（木）午後２時４５分～午後４時１５分

③内　容

参加人数　　構成員６名（うちレポート参加１名）

参加者がそれぞれデート DV 関連書籍を読み、レポートにまとめ発表、意見交流

④成　果

デート DV が発生する背景や支援者が持つべき心構えを学んだ。

またパンフレット制作に向け、今後学ぶべき内容についてもまとめた。

（３）外部講師による研修会

「きちんと知っていい恋しよう。――デート DV の知識とその対応――」

①目　的

デート DV の専門家を外部講師として招き研修を行うことで、パンフレット制作に必要な知識を得るとともに、参加者がデート DV について知識を得る。

②日　時

２０１４年７月１９日（土）　午前１０時～午後３時

③会　場

岩手大学事務局　第二会議室

④参加者

参加人数　１６名

参加者の属性（抜粋）

・盛岡市役所　職員　　・もりおか女性センター職員

・八戸工業高等専門学校　准教授　・保健管理センターカウンセラー

⑤内　容

講師に群馬大学男女共同参画推進室 長安めぐみ先生をお招きし、デート DV の基本知識と，その対処法を中心にお話いただいた。会の後半ではワークショップを行い、「恋愛」をテーマにグループディスカッションなどを行った。

⑥成　果

フリーペーパー制作に活用できそうなテーマや資料・データなどたくさんの知識を得ることができた。

参加者からの感想としては「参加者がデート DV の知識を深める良いきっかけとなった」「支援者の視点から，制作するパンフレットに盛り込むべき内容を学ぶことができた」などの声が寄せられた。

（４）学内外相談窓口・機関訪問

岩手大学保健管理センター、もりおか女性センター、岩手県警察本部

①目　的

デート DV に関する相談窓口・機関を訪問し、相談の方法や施設の雰囲気などを取材しフリーペーパーに反映する。

②訪問日

２０１４年７月～８月

③成　果

実際に行くことで、どのような場所でどういった応対を受けられるのかがわかった。

（５）パンフレット（２０１４年度版）作成

①目　的

２０１３年度のパンフレットは､デート DV への理解を深められる基礎的な内容であったため，今年度は発展的な内容（デート DV のないよりよい関係性をつくれるようになるとともに、万が一、自分や友人がデート DV に直面した際の具体的な対応の仕方）を盛り込んだパンフレットを製作すること。

②内　容

印刷部数２５００部　学内外で配布している（継続中）

③目　次

・デート DV 認知度チェック　　・デート DV ってなに？　　・暴力のサイクル

・あるカップルの一日　・デートDV体験　・相談されたら　・訪問先レポート
・身近に「被害にあっているかも」と思う人がいたら
・Q&A　こんな時どうすれば？　・DV、ストーカー法について
・あなたにとっていい恋とは（不来方祭スナップ）　・相談先一覧

④制作期間

２０１４年１０月～２０１５年１月

⑤成　果

デートDVの基礎知識を盛り込んだ冊子はこれまでもあったが、対応方法について具体的に掲載したものは数少なく、学生の視点から身近なテーマとして制作できた。

（6）パンフレット（２０１４年度版）お披露目会及び小学習会

①目　的

今年度制作したパンフレットを学内外に知ってもらい、デートDVの知識とその具体的な対処方法を学んでもらう。

②日　時

２０１５年2月１３日（金）
お披露目会　午後１時３０分～午後１時５０分
小学習会　　午後１時５０分～午後２時３０分

③会　場

岩手大学学生センターA棟　２階会議室

④内　容

・お披露目会
２０１４年度パンフレットの内容紹介
質疑応答
・小学習会
２０１３年度パンフレット及び２０１４年度パンフレットを使用し、デートDVの基礎知識とその対処法を学習する。

（7）活動成果アンケート

①目　的

２０１３年度および２０１４年度にLet'sびぎんプロジェクトの採択を受けた本活動により、本学学生のデートDVへの認知度が高まったかを調査する。

②内　容

・実施日時　　２０１５年1月～２月
・対　　象　　岩手大学全学部生
・回答人数　　４５２人

男子 43.3%　女子 55.5%

人社 12.6%　教育 41.3%　工 25.0%　農 20.0%

③結　果

「デートＤＶという言葉を聞いたことがあるか？」という問いに対する回答は，「ある」が 364 人（83.5%），「ない」が 66 人（15.1%）だった。これは昨年度の同様の質問に対する回答の「ある」60.7%，「ない」38.2%に比べ，デートＤＶという言葉を聞いたことがある学生は，昨年度より大幅に増えていることがわかった。

その他，詳細なアンケート結果は現在集計中である。

４．結果報告

２年間の活動を通して，構成員のデート DV への理解を深めることができた。そして得た知識を基に，２０１３年度・２０１４年度と二つのフリーペーパーを制作し，岩大生のデート DV への認識や理解度が向上した。

５．今後の活動予定

今回増刷した２０１３年度パンフレット及び制作した２０１４年度パンフレットを活用し、さらに学内でのデート DV 認知度を深めるとともに、被害を受けた学生が一人で悩まずに適切なサポートが受けられるように啓発活動に取り組む。そして、プロジェクト名の通り、学生がデート DV に苦しむことがなく、よりよい関係性を築き、楽しいキャンパスライフを送れるような大学の実現を目指す。

＜活動の写真＞

2014.7.14　書籍を使った自主学習会

2014.7.19　外部講師による研修会

「きちんと知っていい恋しよう。――デート DV の知識とその対応――」

パンフレット（２０１４年度版）

H26 年度 Let's びぎんプロジェクト

実施結果報告書

プロジェクト名：

博物館から海を発信！
～大船渡の生態系を子供たちへ～

１．構成員氏名・学部・学科

No.	氏名	学部	学科課程	学年	備　考 （役職担当等）
1	小田嶋　祐希	農学部	共生環境課程	3	代表
2	佐藤　拓也	農学部	農学生命課程	3	副代表
3	中野　風子	農学部	動物科学課程	1	副代表
4	鎌塚　祥子	農学部	共生環境課程	1	
5	柳久保　萌絵璃	教育学部	芸術文化課程	1	
6	大石　和樹	農学部	農学生命課程	3	

7	高木場　のり子	人文社会科学部	人間科学課程	1	
8	中川　裕太	農学部	共生環境課程	1	
9	舛谷　悠祐	農学部	農学生命課程	3	
10	吉田　奈央	農学部	農学生命課程	3	
11	渡辺　悠花	農学部	農学生命課程	3	
12	日下　美緒梨	人文社会科学部	人間科学課程	1	

２．活動目的

東日本大震災で被災した岩手、宮城、福島の博物館を子ども向けのワークショップの提供で支援するため、ＮＰＯ法人大阪自然史センターが中心となり「東北遠征団」が結成され、沿岸３県各地で活動を展開している。この活動は企画から運営まで東北遠征団が行い、これまで岩手大学の学生有志は各地で開催されるイベントに補助スタッフとして赴いてきた。しかし、今後沿岸の博物館の活性化のためには、地元の人材によってイベント等を企画・実施する段階を迎えている。そのきっかけとなるプログラムを東北遠征団と共同で制作・実施することで、必要なノウハウを吸収することを目的に本プロジェクトを企画した。

３．活動の経過・内容

東北遠征団と打ち合わせ

日　時　４月15日（火）16：30～18：00
場　所　岩手大学人文社会科学部１号館１階ミィーティングルーム
参加者　【東北遠征団】　西澤真樹子　　浜口美幸
　　【岩手大学】　木下今日子（三陸復興推進機構）
　　小田嶋祐希　大石和樹　小野はるか　櫻井彩可
　　佐藤拓也　舛谷悠祐　渡辺悠花　山田庸平

議事録

・プロジェクトの見通し

今年中に実際にチリモンを使って大船渡市立博物館でイベントを行うことは時間的に厳しいが、今年度中には行う予定ということが西澤氏から伝えられた。プロジェクトが軌道に乗るまでは大阪の方々に協力をしていただけるが、ゆくゆくは大船渡市立博物館と岩手大学が主軸となってプログラムやイベントを主導していくことがこのプロジェクトの最終目標となる。

・岩手大学の役割

実際に三陸沿岸での調査に参加することも必要だが、学生は講義があるため毎度の調査に同行できるのは数人と考えられる。そこで、学生の主な役割は大学でも可能な、沿岸で採った海藻などの中から生き物をソーティングしてどのような生き物がいるのか調査すること、それらの生き物の標本の作製に協力して欲しいとのことだった。

イベントを開催する際に、外から来た講師だけでなく、地元の大学生もいた方が、地元の来場者も喜んでくれるそうだ。

・三陸版チリモン

岩手ではチリメンジャコを食べる文化が無いため、大阪でのチリモンをそのまま三陸でチリモンにすることができない。具体的にはチリメンジャコの中から他の生き物を探す、というプログラムが成り立たない。

そこで三陸でチリメンジャコに代わる生き物について検討したところ、東北遠征団からワレカラという生き物や、ワカメなどの海藻が提案された。これらの生き物は、一年中イベントの為に安定的に一定量を確保できるもの、あるいは冷凍保存可能なものであることが望ましい。あくまでも三陸版チリモンプロジェクトは三陸独自のものを目指すのであって、大阪のチリモンに引きずられる必要は無いということが確認された。同時に、東北遠征団、大船渡市立博物館、岩手大学の三者がそれぞれ得るものがあるように活動するという方針が定まった。岩手大学のプロジェクトメンバーにとっては標本作りの技術、イベントの企画から運営までの一連の流れを学ぶ良い機会である。

・イベントのテーマ

チリメンジャコに代わる生き物次第で主となる題材が変わるが、参加して頂く方々が普段なかなか目にする機会の少ない海の中の生態系について、ワークショップ形式で楽しみながら学んで頂くということが最大の目標である。

大船渡市立博物館との打ち合わせ

日　時　4 月 16 日（火）
場　所　大船渡市立博物館
参加者　【東北遠征団】　西澤真樹子　　浜口美幸
　　【岩手大学】　　小田嶋祐希

議事録

・連携体制について

初年度は大阪自然史センターが主導となり、大船渡市立博物館、岩手大学の 3 者でプログラムの開発を進める。その後は大船渡市立博物館と岩手大学が連携して独自でプログラムを実施する。

・岩手大の役割

初年度は海藻等から生物の採取、標本作り。海の生き物を勉強してプログラム作りへ参加する。

・生き物を採取する材料について

博物館に向かう途中にあった商店「サンライズ丸栄」でマツモと生シラスを購入。マツモにはワレカラが多く混じっていたことから材料として利用できることを確認。さらにメカブにもワレカラやヨコエビ類が付着していることを確認。マツモ 1 パックとメカブ 4 株を大学に持ち帰り、これらから生物を採取、記録する。また、材料は冷凍も含めて年中用意できるものとする。ちなみにワレカラを綾里地区では「さむさらりん」、末崎地区では「しゃむしゃらりん」と呼ぶらしい。肌に触れるとかゆくなるところが由来らしい。

・今後の予定

2014 年 5 月 18 日（日）、19 日（月）　大船渡で生物調査
2015 年 1 月 18 日　　大船渡市立博物館で本番

4 月 16 日購入の海藻から生物のソーティング

日時　5 月 9 日（金）17：00～
場所　人文社会科学部 2 号館生物実験室

※採集生物は資料のリストを参照

生物調査　1回目

日　時　2014年5月18日（日）、19日（月）

場　所　大船渡市綾里綾里湾沿岸

参加者　【東北遠征団】　西澤真樹子　浜口美幸　河原風花
玉木さやか　柏尾翔　松浦 宜弘
【大船渡市立博物館】　熊谷洋治
【岩手大学】　木下今日子（三陸復興推進機構）
梶原昌五（教育学部）
小田嶋祐希　　佐藤拓也

・調査の概要

磯とホヤ、コンブの養殖ロープから生物を採集した。岩手大は9月の標本作成講座で使用する海藻を中心に採集し大学へ持ち帰り乾燥させ標本とした。

※採集生物は資料のリストを参照

釜石サテライト訪問

日　時　2014年6月5日（木）

場　所　岩手大学三陸復興推進機構釜石サテライト

協力者　榆井将真

参加者　小田嶋祐希　川上環

・訪問の結果

応対して頂いたのは田村直司さん(産官学連携専門職員)、澤井雅幸さん(三陸水産研究センター　水産・養殖部門　プロジェクト補佐員）の 2 名。大阪発祥のチリメンモンスターの三陸版を開発したいという今回のプロジェクトの内容を説明し、思い当たる採集方法など無いか尋ねたところ、関西と同じような方法は難しい。しかし、三陸でも生産しているコウナゴとこれまで採集してきたワレカラやヨコエビを混ぜればオリジナルに近い形に再現できるというアイディアをいただいた。後に田村さんから紹介いただいた商店よりコウナゴを注文してみたが、ワレカラ等は見つからず産地が石巻であったので博物館で使えるか不安が残った。

三陸の海をテーマにするにあたり、構成員がまずフィールドとなる海に触れる必要があることから澤井さんに指導をお願いし夏季休業中に1泊2日で生物採集を行うことが決定した。

田村さんからは、放流用に養殖しているヒラメの稚魚で余剰や奇形のものを標本や教材として活用できないかという話をいただいた。

生物調査　2回目

日　時　　2014年8月10日（日）、11日（月）
場　所　　山田町船越南海岸
参加者　　小田嶋祐希　　佐藤拓也　　由利昂大　　吉田奈央　　舛谷悠祐
渡辺悠花　　大石和樹　　中野風子　　中川裕太　　柳久保萌絵璃
計10人

調査の概要

1日目は釜石の港で魚やプランクトンの採集、2日目は大船渡市の船作海岸で磯の生物採集の予定だったが台風の接近により磯へ出ることが危険となった。そこで2日目の採集場所を危険の少ない山田町の船越南海岸へ変更し、海岸に打ち上がった海藻等を採集した。採集した海藻は大学に戻りすぐ乾燥させ標本とした。

今回の調査場所は海藻が多く打ち上がることを確認することができ、後の3回目の採集に役立てることが出来た。

※採集生物は資料のリストを参照

標本作成講座

企画名　「実践！教育現場のためのプラスティネーション+樹脂封入標本作成講座」
日　時　2014年9月6日（土）10：00～
場　所　人文社会科学部2号館生物実験室
目　的　海の生物を教材に用いる標本とするための技術を岩手大学のプロジェクトメンバーが習得する。また、興味のある岩手大学の学生や教育関係者の方にも参加してもらい、本プロジェクトや標本製作へ理解を深めてもらう。
講　師　三橋弘宗さん
兵庫県立人と自然の博物館学芸員。専門は河川生態学,保全生態学,博物館学

内　容　封入標本…透明のアクリルにウニや甲殻類などをとじこめて作る。毛虫やタンポポの綿毛なども入れられ、手にとって様々な角度で眺められる標本を製作。

プラスティネーション…海の生物は瓶入りの液浸標本が一般的だが、眺めるだけで形を確かめることは難しい欠点がある。シリコンを染み込ませたプラスティネーション標本ならそのままの形を残すことができ、教材から展示まで様々な活用ができる。

シートプラスティネーション…海藻や小さな甲殻類を透明のシートに貼り付けて作る。弾力のあるシートなら、丸い柱に巻きつけて曲げても割れない海藻展示を作ることも可能。

○上記の 3 種類の標本を時間差で作成したプラスティネーションは作り方の解説のみで、封入標本とシートプラスティネーションは参加者一人が 1 点ずつ作成し持ち帰ってもらった。封入標本の中身は先生が持参の水生昆虫か、各自が野外で採集した物。シートプラスティネーションの中身はこれまでの採集で集めた海藻。

共　催　　認定ＮＰＯ法人大阪自然史センター、岩手大学
協力；大阪市立自然史博物館兵庫県立人と自然の博物館、
NPO 法人西日本自然史系博物館ネットワーク

宣　伝　　8 月 12 日のアイアシスタントや関係者への個別メールを通じて学内に募集を行った。近隣の自然科学系の教育施設である盛岡市子ども科学館、ネイチャーセンター、藤井千春さん（元岩手県立博物館学芸員）には個別に案内を行った。また、共催の大阪自然史センターからは協力先である南三陸町ネイチャーセンター(友の会)に案内をしていただいた。

参加者　　22 名（学生 13 名、学内職員 2 名、学外 7 名）
参加者の所属
・農学部農学生命課程応用昆虫学研究室
・人社環境
・農学部動物科学課程食肉科学研究室
・岩手大学農学部応用生物化学課程
・NPO 法人大阪自然史センター
・弘前大学フィールドサイエンス研究会
・盛岡市立高等学校
・岩手大学三陸水産研究センター
・岩手大学農学部農学生命
・南三陸町ネイチャーセンター準備室
・岩手県滝沢森林公園（指定管理者 KOIWAI）
・岩手大学教育学部理科サブコース生物研 4 年

・盛岡市立高等学校自然科学部
・岩手大学農学部動物科学課程
・岩手大学教育学部
・南三陸ネイチャーセンター友の会
・南三陸町（ネイチャーセンター準備室）
※参加者へのアンケート結果は資料を参照

プログラムの決定

これまでの生物調査で多種の海藻を採集できた点、標本作成講座でシートプラスティネーションの技術を学んだ点、本プロジェクトの発端となった「チリメンモンスター」と呼ばれる小さな甲殻類や稚魚の生息場所が海藻の生える場所である点から、1 月の大船渡市立博物館でのワークショップの内容は、海藻とその周りの生きものを取り上げたシートプラスティネーション標本作成に決定し企画書を作成した。大船渡で実施の前にワークショップの実践を積むために企画書を盛岡市子ども科学館に送付した。科学館と内容や日時について協議を重ね 12 月 20 日（土）に実施が決定した。
※企画書は資料を参照

ワークショップ 1 回目

企　画　名	「海をお持ちかえり！海藻シート標本をつくろう」
日　　時	2014 年 12 月 20 日（土）13:30～15:00
回数と人数	①13:30 – 14:00　②14:30 – 15:00（定員各回 15 人，2 回開催） ※朝 9 時より科学館受付にて整理券を配布
場　　所	盛岡市子ども科学館実験室
広　　報	盛岡市子ども科学館のホームページと館内ポスター、盛岡市の広報誌「広報もりおか」（12 月 1 日発行）のイベント欄、自然史探偵団のツイッターにより広報を行った。
運営メンバー	小田嶋祐希　佐藤拓也　中野風子　大石和樹　渡辺悠花 吉田奈央　鎌塚祥子　高木場のり子　日下美緒梨 平山史歩　　中川裕太
参　加　者	11 人

参加者にはアンケート（参加者が子どもの場合は保護者に依頼）を取り意見を募った。ワークショップ終了後にはミーティングを行い、使用する道具や実施の手順に改善を加えた。※アンケートの結果と宣伝用ポスターは資料を参照

ワークショップ２回目

企　画　名	「海をお持ちかえり！海藻シート標本をつくろう」
日　　時	2015 年 1 月 18 日（日）10:00～16:30
回数と人数	①10：00～11：00　②12：30～13：30 ③13：30～14：30　④14：30～15：30（定員各回 15 人）
場　　所	大船渡市立博物館多目的ホール
広　　報	大船渡市立博物館から大船渡市内小学校チラシ配布､ホームページ掲載、東北遠征団のホームページ掲載、自然史探偵団のツイッターで広報を行った。
運営メンバー	小田嶋祐希　佐藤拓也　大石和樹　吉田奈央　渡辺悠花 中川裕太　鎌塚祥子 平山史歩　中野風子　高木場のり子
参　加　者	34 人

東北遠征団は消しゴムハンコでオリジナルカレンダーを作る「ペタペタ海の生きものカレンダー」を開いた。ここで使う消しゴムハンコに、海藻とワレカラの消しゴムハンコを 12 種類作り混ぜてもらった。

参加者にはアンケート（参加者が子どもの場合は保護者に依頼）を取り意見を募った。ワークショップ終了後には東北遠征団と共にミーティングを行い感想や反省点を共有した。

※アンケートの結果と宣伝用ポスターは資料を参照

４．結果報告

標本作成講座

講座を受けて大船渡でのプログラムを考えるアイディアをもらうことが出来、プロジェクトを進める上で大きな転換点であった。

さらにプロジェクトメンバー以外にも参加者を募集したことで、より広く技術を共有することが出来た。講座の内容についてアンケートで参加者全員から「良い」（1 人はすごく良い）という回答をいただき、参加者の満足度は十分に得ることができた。今回の講座は本来壊れやすい標本を手にとって見てもらえる技術を学ぶ内容であり、アンケートでは「講義やゼミで使える」「教員となった時に子供たちに見せることができる」「施設でハンズオン展示を作りたい」「個人でもできそうだ」と学んだ技術をこれから応用したいという意見が多く、参加者それぞれにとって今後の刺激となったと考えられる。

反省点として、講座終了後のフォローが不十分な点がある。デモンストレーションした「プラスティネーション」の完成は講座終了の数日後で参加者はその日に完成品を見ることができなかった。参加者にその完成品を見てもらう機会を作

ればより良かった。

ワークショップ１回目

企画書では分からない問題点を今回で洗い出すことができたのは大きな成果であり、特に使用する道具の変更・追加は大船渡で大変画期的だった。溶剤を入れる容器を、アルミ皿から蓋に筆が付属されたプラスチック容器に変えたことで溶剤のにおいを大幅に軽減することができた。また、樹脂を塗る道具を刷毛から木製スプーンに変えたことで子どもが塗りやすくなり、筆を洗っていた運営スタッフの手間が軽減された。

ワークショップのスタッフを経験するのが初めてのメンバーもいて、参加者への声かけなど大船渡での前に実践経験を積むことが出来た。反省点は、物品の準備に追われ、事前にスタッフとしての動きなどを練習することが不十分で直前に慌てたことである。この点は大船渡では必要な工程を文章化して全員で読むという事で改善することが出来た。

参加者アンケートでは全員から「満足している」という回答をもらうことが出来た。大人の参加者からも「きれいで楽しめた」という回答があり、大人も満足できる内容であることが確認された。

ワークショップ２回目

科学館での経験を十分に発揮され、細かいトラブルはあったものの成功したと言える。終了後の反省会でプロジェクトメンバーから、「マニュアルや 1 回目が終わった後のミーティングが生きた」という感想が多く出てきた。また、会場での役割分担は交代で担当することで今後も同じワークショップを開くときに誰でも担当になれるようになった。2 回のワークショップを通して運営スタッフとしてのスキルが上がったと全員が実感したはずである。

会場の一角では、本家のチリメンモンスターが行われており、子どもが夢中になっていた。今後は海藻シート標本との組み合わせが可能と考える。

後に樹脂の硬化が不十分な回があったことが分かった。原因を三橋さんに尋ねたところ、海藻に付いているグリセリンやアルコールの混入の可能性があるようである。今後活動を継続していくにあたり、樹脂について経験を積む必要があると感じた。

以下大船渡市立博物館佐藤館長の感想

———————

3.11 の津波が縁で、『なにわホネホネ団』の皆様に、丸抱えでお世話になった事業でしたが、今では、当館教育普及事業の目玉事業になりつつあり、将来的にも継続していきたいものと考えています。

その一方で、いつまでもホネホネ団の皆様にというわけにもいかないだろうとも思っており、岩手大学の学生さんに何とか繋がりがほしい、どんな手立てがあるかと、手探りの状況でもありました。

それが、昨年あたりから形になってきて事業実施となったわけですが、皆さんの準備段階から、その都度必要に応じての検討や修正の対応を見るにつけ、真摯な姿勢には頭が下がる思いです。

具体的な事業の内容については、海藻標本も当館では初でしたので、とても面白かったです。

次は、三陸の海にいるモンスターさがしもやっていただけたらと期待しています。

私どもといたしましては、今回のような形で、可能な限り継続して応援していただけますと、ありがたく思っております。

―――――――――

全体を通して

本プロジェクトの目的である「東北遠征団と共同で制作・実施することで必要なノウハウを吸収する」は、これまで東北遠征団が行ってきた現地調査からプログラム開発、実施までワークショップ開催の一連の流れを実践したことで達成したといえる。実践を通して、使う道具の選定方法や解説書の作り方・魅せ方、当日の運営方法など多岐にわたるスキルを学んだ。このスキルは今後活動を継続していくに当たり大きな糧となるだろう。

５．今後の活動予定

大船渡でアンケートを書いていただいた保護者の一人の自由記述に「海は近くにありますが震災後は海に行くことがなくなり親としても行くというか行かせることができなくなっています。子供たちは海が好きなので今後もこのような企画があれば楽しいと思います。」という感想をいただいた。現在の沿岸は防波堤やかさ上げの工事、そこで暮らす方々の心の問題など様々な事情で海に気軽に近づけなくなっている。そのような状況だからこそ、海を楽しめる企画がこれから沿岸で必要になっていると前述の感想から感じた。

本プロジェクトは大船渡市立博物館や漁師の方々、釜石サテライトなど沿岸と関わりを持つきっかけとなった。今回つかんだきっかけを今後も維持しながら活動を継続していく。

まずは海藻シート標本作りを私たちが提供できるプログラムとして定番化させることである。直近では盛岡市子ども科学館で再度開催することを目指す。これは前回の開催より多くが改善されていることの報告の意味がある。

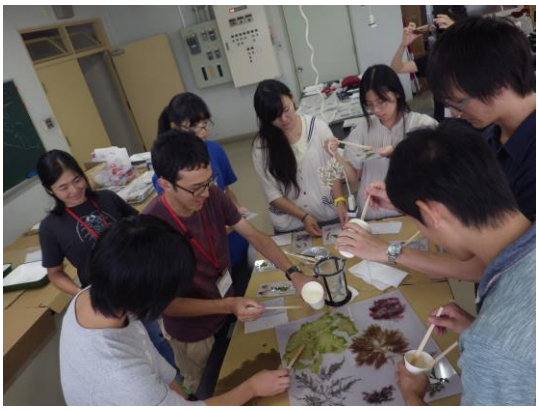
また、沿岸での開催地の開拓も行っていく。釜石サテライトと共同でワーク

ショップができないか今後検討していきたい。

標本作成講座について、「また開いてほしい」という意見が多く、今後内容を変えながら同じ趣の講座を開いていきたいと思う。

佐藤館長の感想に「次は、三陸の海にいるモンスターさがしもやっていただけたらと期待しています。」とあるように真の三陸版チリメンモンスターに期待が寄せられている。今回のプロジェクトでは三陸版チリモンと言えるレベルまでは達成できなかったので、今後の大きな目標は本家チリメンモンスターのクオリティーにできるだけ近づけることである。そのために、8 月の生物調査でできなかったプランクトン採集など沿岸での調査を継続して、沿岸と向き合い続けていきたい。

＜活動の写真＞



H26 年度 Let's びぎんプロジェクト

実施結果報告書

プロジェクト名：

障害について考えるワークショップ「hanana cafe」

１．構成員氏名・学部・学科

代表	阿部　愛美	人文社会科学部　法学・経済課程	４年
	種綿　鼓動	教育学部　学校教育教員養成課程	４年
	斎藤　初珠	教育学部　学校教育教員養成課程	２年
	高橋　穂乃香	農学部　応用生物化学課程	２年
	千田　裕海絵	教育学部　学校教育教員養成課程	２年
	千葉　優香子	教育学部　学校教育教員養成課程	２年
	村田　笑美	教育学部　学校教育教員養成課程	２年
	山内　莉歌	農学部　農学生命課程	１年

２．活動目的

①岩手大学生が「障害」や「多様性」について考えるきっかけをつくる。
②その上で学生にとって身近である大学生活をテーマに、様々な人が過ごしやすい大学について考え、学生自らがその実現へ向けてアクションをおこせるようになる。

３．活動の経過・内容

（１）「STIR cafe」への参加
・日時：2014 年 11 月 2 日（日）14:00～16:30
・参加目的：企画づくりの参考にする
・主な内容：障害者福祉についての現状についてのお話、参加者同士でのグループワーク

（２）「第 1 回 hanana communication cafe」開催
・日時：2014 年 11 月 30 日（日）13:30～16:30
・参加人数：12 名
・目的：自己理解・他己理解を通し、多様な学生が過ごしやすい大学について考える
・主な内容：「共通点探し」、「他人から見た自分」等の自己理解・他己理解を進めるためのグループワーク

（３）「第 2 回 hanana communication cafe」開催
・日時：2014 年 12 月 21 日（日）13:30～16:30
・参加人数：12 名
・目的：自己理解・他己理解を通し、多様な学生が過ごしやすい大学について考える
・主な内容：「岩大生についてのクイズ大会」、「多様な学生が過ごす大学に必要な物事とは？」等のグループワーク

（４）「第 3 回 hanana cafe」開催（※岩手大学映画研究会様との共催）
・日時：2015 年 1 月 13 日（火）16:30～19:00
・参加人数：20 名
・目的：映画鑑賞を通じて、多様性について考える
・主な内容：映画「チョコレートドーナツ」鑑賞、感想交流、映画で取り上げられた題材をもとにグループワーク

（５）「第 4 回 hanana cafe」開催
・日時：2015 年 2 月 14 日（土）13:30～16:00
・参加人数：16 名（学生、社会人）
・目的：仲間の日常生活における困り感（特に発達障害）について理解を深める

・主な内容：発達障害についてのミニ講義、発達障害の診断を受けている学生から当事者視点でのお話、フリートーク（感想・意見交流）

（６）活動の広報・報告紙「hanana 通信」の作成

参加後の振り返りや次回の活動に新たな参加者を巻き込むために、講義での広報やワークショップの様子がわかる「hanana 通信」の作成を行った。

フライヤー

hanana 通信

４．結果報告

全体を通して、

＜改善点＞

①計画性の不足

当日になってから準備不足が露呈することが多くあった。あらかじめ見通しのあるスケジュールを立て、メンバーで役割分担をしながら、余裕のある企画準備や広報活動を行っていくべきであった。

②協力して下さっている方との関わり方

企画内容が準備段階で大きく変わることが多く、その点が一部でしか共有できていなかった。また、協力者・参加者に対してのこまめで迅速な連絡が欠けていたこともあり、関わっていただいているということを踏まえた丁寧な行動が足りていなかった。

③「障害」の表現など、活動の意図が参加者に伝わるような言葉選び（広報）・企画内容

はじめから他人事として捉えられてしまうことを防ぐために「障害」という言葉を使わ

ずに広報や企画作成を行った。その結果、私たちの活動の意図が参加者に伝わりにくくなってしまった部分があり、伝えたいことをどのようにアウトプットし、企画をつくっていくのか充分に検討していく必要がある。

＜良かった点＞

①企画側も参加側も学生

学生目線での企画ができ、またそこに参加する人も学生であったため、他の人の感じていることや考えたことも「自分事として」捉えながらの活発なワークショップにすることができた。

②様々な関心を持つ人たちを巻き込むことができた

結果的に幅のある活動を行ったため、様々な関心を持つ岩大生が参加をしてくれた。参加のきっかけとなる入り口はそれぞれでも、多様な活動全体を通して私たちの活動の意図を伝える機会をつくることができた。

③メンバーも参加者も新たな気づきを得た

もともと関心のあった人もそうでない人も、「普段の大学生活に反映できるテーマだった」「自分も今後こういった活動をしたい」という声を寄せてくれた。そもそも日常生活では、なかなか障害や多様性について話題にすることはないが、こういった場だからこそ自分の考えや本音を話すことができ、率直な意見交流ができたと考えている。

５．今後の活動予定

はじめて活動してみて分かった部分も多く、何より、こういったテーマに対して全く関心のない人ばかりではないということが企画をつくっていく上で大きな励みになった。活動の明確な成果を測定することは難しいが、答えのないこと、普段は話せないことについて大学生のうちにインプット・アウトプットする機会をつくることは非常に重要である。

メンバーの卒業や各々の活動があるため、来年以降の活動は未定であるが、活動継続に関心を示してくれているメンバーや参加者もおり、今年度の流れや反省を踏まえた新たな活動が考えられる。

＜活動の写真＞

H26 年度 Let's びぎんプロジェクト

実施結果報告書

プロジェクト名：

Talk to me in English project

１．構成員氏名・学部・学科　（一部）

瀬野美希・農・応用生物化学課程
田中綾乃・人社・環境
佐藤美沙希・教・英語学科
小原澪・教・英語学科
高橋朝美・人社・環境
尾形芽衣・農・農学生命課程
鈴木千春・農・応用生物化学課程
小原舞子・人社・国際文化課程
須田穂高・農・農学生命課程
一條由佳・人社・国際文化課程
伊藤秀平・人社・環境
松倉杏奈・農・共生環境課程
石田宗一郎・工・社会環境学部
桜庭あやか・人社・環境
中野恵理子・人社・環境

吉田かさね・農・応用生物化学課程
太田和翔・教・英語学科
小保内明・人社・国際文化課程
古山はるか・農
松倉聖奈・人社・国際文化課程
伊藤菜摘
水島祐樹・工・社会環境学科
内島あずさ・人社・法学経済課程
加藤亜美・人社・国際文化課程
植松千尋・人社・経済課程
藤井孝介・農・共生環境課程
金野妃菜子
小椋陽史
瀬戸弘樹
安田一喜
中野風子
佐々木博史
高橋拓也
中村聡
遠藤あきほ
佐藤由紀子
Hope Steiner
Veronica Dow
Shaina Harris
Reka Fekete
Oddny Momo
Jonel Richardson

２．活動目的

ピンバッジを「英語を話したい」という意思表示として用いる。ピンバッジをつけることで、装着している人同士が英語で話すきっかけとし、学内で英語を気軽に話せる環境づくりを目指す。会話の内容は特に指定せず、その人のレベルや状況に応じた内容としている。したがってあいさつ程度でも構わず、あくまで英語を使う機会を増やすことを目的としている。

３．活動の経過・内容

10 月　授業前宣伝・SNS（Twitter Facebook LINE）・ポスター掲示によってピンバッジ活動を周知させた。

英語限定のハロウィンパーティ「Halloween Party In English」を行った。
場所は大通りのニルヴァーナで行い、アーラム大学の交換留学生 5 名を含めた 18 名が参加。ピンバッジプロジェクトを周知させるため、より多くの学生に参加してもらうことが目的であった。参加学生は工学部・農学部・人文社会科学部・教育学部の全学部の学生が参加し、その分布は、工学部は 1 人のみの参加であったが、その他の学部は 3～4 人ずつ、また学年も 1 年生～4 年生までと、学部や学年の偏りがなかった。また、ハロウィンパーティ開催中も活発に英語で話している参加者が大多数で合ったことが良かった点であると思う。
改善すべき点は、パーティ開催後にアンケート調査等を行い、今後の活動にフィードバックできるよう意見収集をすべきであったがそれができなかったこと。このパーティの活動報告を大々的に行い、より多くの人に活動内容を知ってもらえるよう、イベントの宣伝だけではなく活動報告として SNS を利用すべきであった。

11 月　「English Free Talk Cafe」企画・宣伝期間
ピンバッジ活動の継続

12 月
～1 月「English Free Talk Cafe」を毎週金曜日の 18：00 から図書館のラーニングサポートデスクにて開催を始める。
英語で会話をしたい人が集まり、イングリッシュゾーン（その空間ではメインの言語を英語とする）を作り、好きな話題(近況・週末の予定・読んだ本の説明 etc…)について話すイベント。このイベントは、参加人数は最大でも 6 人程度の少人数が望ましく、英語での会話を続かせることを目的として行った。
参加者は週によって変動があり、少ないときは 3 人、多いときで 8 人程度であっ

た。良かった点は、毎週行われるイベントであり、週末ということもあったため時間的・精神的余裕があり、参加者がよりリラックスできるような空間にすることができた。参加者が顔見知りになることで、「英語を話したい」という同じ目的を持った人同士が学年を越えて知り合え、それぞれの経験を共有することで、各々の英語学習に対するモチベーションを向上するきっかけにもすることができた。
改善点は、宣伝を上手く行うことができず、ほとんど参加者に変化がなかったことである。アルバイト等の都合で参加できない学生も多く見受けられたため、金曜日の夕方だけではなく、もう 1 日実施日を増設し、週に 2 回程度実施すればより多くの学生に参加する機会を持てたのではないかと思う。

４．結果報告

これらの活動を経てもっとも感じたことは、授業前宣伝・SNS・ポスター掲示・口コミ効果によって、「Talk to me in English project」の存在を知っている学生や、ピンバッジを身につけてくれている学生はとても多くいたが、実際にバッジをつけている人同士で英語での会話をする機会はほとんど見受けられなかったということである。半年間、という期間では「日常生活で」英会話をするということは日本人学生にとって非常にハードルが高いことなのだと改めて痛感した。

英語を使ってもらう機会を増やすためには、イベントの開催が必須である。そのため、後半から活動日時を増やした。これによって、熱意のある学生は頻繁に訪れてくれ、「英語を本当に話したい学生」間での交流を盛んにし、それぞれの目標や経験をシェアすることで英語学習へのモチベーション向上を図ることができた。

しかし、発足当初からの予想にもあったように、日本人同士での英語使用のコミュニケーションは非常に難しく、イベント時でも、日本人同士でも英語での会話は活発に行われていたが、それでも留学生を交えることで初めて「英語のみ」の空間が出来上がり、日本人だけでは英語で説明しにくいこと・自信がないことは日本語で話す、というスタイルが主流だった。このことから、日本人同士でも可能な限り英語で話そうとチャレンジしやすような環境にするため、あらかじめ指針を明確に立てておく必要性を感じた。

５．今後の活動予定

今後の活動予定は、これまで週に一度開催していた「English Free Talk Cafe」の開催回数を増やし、多くの学生が参加できるようにすることである。
また、その開催場所を図書館だけではなく、中央・農学部・工学部食堂や、空き教室など、多種多様な場所で行うことで、空いている時間に英語を話すことができるようにする。その光景を他の生徒が目撃したり、また飛び入り参加することで、学内で英語を話すこと・英語を話している光景を見ることに慣れるようにする。

また、アンケート調査で英語学習における不満や要望を尋ね、ニーズを知ると同様に、それに合ったイベント企画・運営をする。
さらに、イベント時では、「英語限定」であることを明確に伝え、日本人同士であっても英語で話し、「伝わらないかもしれないが、やってみる」という姿勢で取り組んでほしい、ということを伝える。
＜活動の写真＞

TALK
TO
ME
Iwate University
Shall we speak English?
このピンバッジを見たら
英語で声をかけてください！
ピンバッジは 国際課・図書館で配布しています。
質問等はa8213021@iwate-u.ac.jp(瀬野)まで

H26 年度 Let's びぎんプロジェクト

実施結果報告書

プロジェクト名：　岩手大学　学生フォーミュラプロジェクト

１．構成員氏名・学部・学科

代表	山本　暁雅	工学部機械システム工学科　３年
副代表	廣野　義明	工学部機械システム工学科　３年
	金屋　裕樹	工学部機械システム工学科　３年
	増田　竣亮	工学研究科フロンティア材料機能工学専攻　M1
	佐々木　朗	工学部マテリアル工学科　研究生
	笹野　大祐	工学部機械システム工学科　１年
	小向　渉	工学部機械システム工学科　３年
	畠山　潤平	工学部機械システム工学科　３年
	加藤　文弥	工学部機械システム工学科　３年
	山生　章義	工学部機械システム工学科　３年
	佐藤　和貴	工学部機械システム工学科　３年

２．活動目的

本プロジェクトでは、H27 年度学生フォーミュラ大会の出場を目標としている。その中で本年度は、エコランを通じて車両の製作･改良やグループ運営のノウハウを学んでいく。また、一関高専の澤瀬薫先生に車両の設計・製作についてアドバイスしていただき、設計・製作のノウハウを学ぶ。さらに SNS 等を通じた活動報告と、これまでの活動を基にしたスポンサー募集活動を行っていく。

３．活動の経過・内容

11 月　ホンダカーズ盛岡上堂店にて、エコラン車両の展示

一関工業高等専門学校に行き、澤瀬先生に車両についてのアドバイスをいただく

12 月　車両コンセプト決定

車両設計開始

１月　車両の空間配置設計の決定

個別設計開始

４．結果報告

本年度の「Honda エコマイレッジチャレンジ」では、三年目の参加であったが、リタイアという結果になってしまった。前日の練習走行では完走することができ、去年の練習走行の結果よりも記録が少し伸びていたので、去年の車両の改善点を少し修正することができたと考えられる。しかし、車両のメンテナンスを怠っていたために、リタイアしてしまったので、車両の整備体制が悪かったことが反省点としてあげられる。今回のエコランを通して、学生フォーミュラでの車両の製作・改良の基礎やグループ運営のノウハウを身に着けることができたと考えられる。

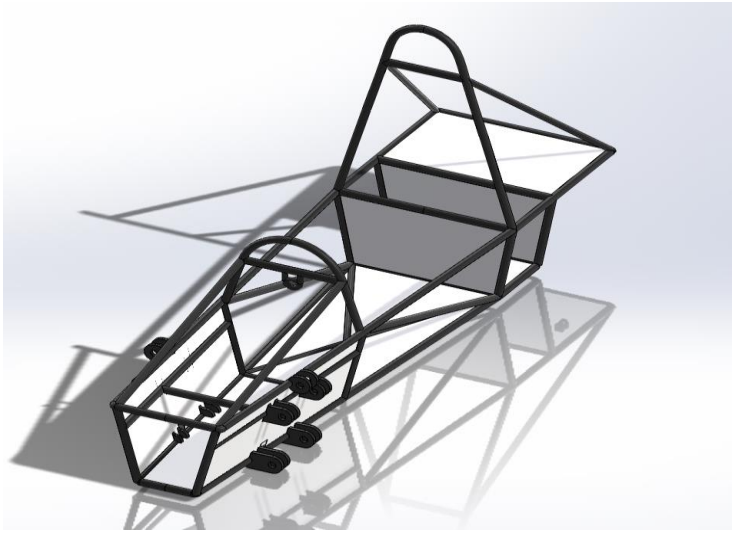
11 月に一関工業高等専門学校に行き、澤瀬先生にフォーミュラ車両の設計・製作についてのアドバイスをいただき、車両コンセプトの大事さを学ぶことができた。

今回のプロジェクトでは、車両コンセプトを決め、フレームの設計まですることはできたが、予定していた年間計画の試験車両を作成することができなかったので、スケジュールの組み立てに問題があったことが反省点としてあげられる。今回の経験を来年度での活動に生かしていきた。

５．今後の活動予定

・4 月サークルオリエンテーションにて、車両展示
・プロジェクト概要の説明
・新体制発足
・車両の設計・改良
・自動車関連のセミナー参加
・他団体との情報共有とともに、知識及び技術の向上
・スポンサー探し

＜活動の写真＞



H26 年度 Let's びぎんプロジェクト

実施結果報告書

プロジェクト名：　でんでんむし ぐるぐる盛岡

１．構成員氏名・学部・学科

氏名	学部	学科課程	学年	備　考 （役職担当等）
阿部慶太	農	農学生命	2	代表
太刀川晴之	農	共生環境	2	
吉田拳	人社	国際文化	2	
吉野由起	人社	法学・経済	1	
石井友美	工	応化	1	
笹原梨那	工	応化	1	
平門由佳子	農	共生環境	1	
森諒平	農	共生環境	1	副代表
齋藤ゆり子	農	動物科学	1	

２．活動目的

盛岡市内を走る都心循環バス「でんでんむし号」を利用した盛岡の新しい「歩き方」を学生の視点から地域情報誌という形式で発信することによって、観光客や市民など多くの人に実際に足を運んでもらい、まちを盛り上げること。岩大生にあまり認知されていない盛岡市内の公共交通機関の利用法を紹介すること。

３．活動の経過・内容

1.活動経過

平成 26 年

10 月　活動開始、全体の企画や計画を立てた。

11 月　取材、交渉

12 月　取材、記事作成、デザインや編集

平成 27 年

1 月　取材、記事作成、文章校正、デザインや編集、入稿、納品

2 月　配布設置、反省会

2.紙面構成

・全 45 ページ (表紙裏表紙を含めて 48 ページ)

・B6 サイズ (手に持って歩けるほどのハンドブックサイズ)

①表紙

②1 ページ　「冊子の紹介」

③2-3 ページ　「でんでんむし号の路線図」

④4-39 ページ　「各バス停の紹介」

全 19 カ所のバス停の魅力的な場所、観光スポットなどバスを利用していってほしいところを紹介。地図やスポットの基本情報、写真を載せて読む人の理解が深まるように工夫した。配置やデザインを工夫し、見やすいように配慮することができた。

⑤40-43 ページ　「おすすめコース特集」

でんでんむし号の 1 日フリー乗車券を利用して盛岡という「まち」を楽しめるようにおすすめコースを載せた。でんでんむし号の特徴をうまく特集として組むことができた。

⑥44-45 ページ　「編集後記とサークル紹介」

3.発行部数
発行部数：7000 部

4.配布・設置場所　※概数
- ✓　取材場所　1400 部
- ✓　大学学生支援課　1100 部
- ✓　バス会社　500 部
- ✓　各ホテル(15 カ所ほど)　300 部
- ✓　学内配布 300 部
- ✓　クロステラス　200 部
- ✓　プラザおでって、駅の観光案内所　150 部
- ✓　盛岡市役所 100 部
- ✓　MOSS ビル 100 部
- ✓　県立市立図書館　100 部
- ✓　らら・いわて　50 部
- ✓　もりおか歴史文化館　50 部

配布はサークルのメンバーだけでは難しいので、学生支援課、岩手県交通株式会社、盛岡コンベンション協会の方々に協力いただいた。現在、配布が未完了で残部がある。(来年度の新入生に配布するなどの目的に 2000 部ほど残部として保持する。)

4．結果報告

1.『でんでんむし ぐるぐる盛岡』を手に取った人の声
- ・全体的にうまく作られている。
- ・表紙のセンスがいい。
- ・自分の知っているところが掲載されていてなんかうれしい。
- ・でんでんむし号に乗ってどこか行くことが楽しい。
- ・Facebook を見ていて、学生の生き生きした活動に活力をもらった。
- ・冬場は特にいいかも。

2.NPCN としての反省
- ・情報誌を無事に作り上げることができてよかった。
- ・全体計画の予定立てが甘かったので入稿期限間際になって深夜までの活動が連日と続き、大変な目にあってしまった。

・学内で配布会を開き、多くの岩大生に手に取ってもらえたりと、配布は様々な人と協力してうまくできたと思う。
・サークル内での役割の分担が難しかった。失敗したので次からの活動の課題になると思う。
・ネットを活用した広報が足りなかった。
・冊子内の写真には統一性に欠ける面が見られる。今回の企画を通して、意識すべきところが明確に判断できるようになると思う。
・前回の Let's びぎんプロジェクトの『うえだっしょ！！』第二号では取材先との距離感が反省対象となったが、今回はその反省を生かして市民の人々と親密に取材ができたと思う。

3.総括

情報誌を全 45 ページに及ぶ冊子という形式で作れたことが大きかった。スケールは盛岡市内のでんでんむし号の移動範囲に限定することでバランスよく様々な魅力的なものをまとめることができたと思う。色々な人に手に取ってもらい、今回の活動はサークルの 3 年生がいなくなってから、1、2 年生の 9 人として初めての活動であった。未熟ながら情報誌作成という目標を達成できたことに大きく満足している。盛岡市民と触れ合うことでまちと私たちの距離が縮まり、楽しく活動ができたのもよかった。活動をしていくことでサークル、個人共に成長することができたいい機会となったので反省点は今後の活動に活かしていき、よりよいものにつながると思う。

情報紙の作成に際し、取材に協力していただいたお店や盛岡市民のみなさん、配布に協力していただいた方々、そしてサポートをしていただいた支援課のみなさんや先輩方に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

５．今後の活動予定

引き続きこれまでのサークルの方針で活動を進めていくつもりである。今回の活動は情報誌作成がメインであったが、それに限らず、今後は次回以降の活動についての話し合いの場を持ち、今後の計画を立てる。企業や団体による協働の依頼やお誘い、学内外の制度を鑑みながら、各メンバーが取り組みたい “まちづくり”を提案し合い、コンペティション形式で活動を決め、実施していきます。よろしくおねがいします。

＜活動の写真＞

H26 年度 Let's びぎんプロジェクト

実施結果報告書

プロジェクト名：放置自転車クリーン＆リユース作戦

１．構成員氏名・学部・学科

コアメンバー

吉田　拳　人文社会科学部国際文化課程 2 年（代表）

紫葉隆則　農学部社会環境工学科 2 年（副代表）

村上央樹　工学部機械システム工学科 4 年

斉藤量平　工学部電気・電子情報システム工学科 4 年

白岩卓也　工学部社会環境工学科 2 年

２．活動目的

大学構内の放置自転車がゼロの状態を達成、継続させ、美しく機能的な岩手大学を取り戻す。同時に、岩手大学生の環境意識とマナーの向上を図る。

当初の数値目標
(ア) 2015 年冬までに自転車リユース 10 台以上。
(イ) 2016 年前期の放置自転車回収時に、放置自転車 50 台未満。

３．活動の経過・内容

予定していた活動内容
I. 自転車処分簡易化制度の創設
II. 卒業生自転車回収の利便性向上
III. 自転車リユース制度の創設
IV. 上記 3 制度 および マナーアップ広報活動

9 月 プロジェクト採択

プロジェクト採択にともなって、学生支援課さんと意見を交換しながらより詳細な企画書と自転車処分簡易化制度の案を作成しました。また、高松交番さんに仲介していただき、盛岡東警察署生活安全課さんと連絡をとることができました。

10 月 警察、大学当局、学生の 3 者による会議

盛岡東警察署生活安全課、岩手大学学生支援課、私たち学生の 3 者で会議を行い、自転車処分簡易化制度案の内容をつめました。この場で、防犯登録抹消の届出などの一部業務を学生団体が代行可能であると決まり、それに従って修正案を作成しました。

11 月 計画の見直し

このとき、自転車処分簡易化制度と同時に自転車リユース販売の制度を発足させ、その実行組織を学内カンパニーとして創設しよう、と動いていましたが、放置自転車の特性と法的な問題から、それができないことになり、制度プランの見直しをせざるを得なくなりました。その後、学生支援課さんとのやりとりで、制度を完全に大学のものとすることに

決まり、新しく企画をつくりなおすことにしました。

12 月　工学部東側の放置自転車回収

2014 年春の放置自転車回収時に余った資材を使い、工学部東側（工学部食堂、　、　付近）の放置自転車 35 台を回収しました。まず、周辺の自転車に黄色い警告の札を付け 1 週間ほど待ちました。それでもまだ札がついているものは、学生センターA 棟前の屋根がない駐輪場へ移動させました。また、回収した放置自転車の防犯登録番号や車体番号を調べて一覧にし、盛岡東警察署生活安全課に提出しました。

４．結果報告

レッツびぎんプロジェクト期間中に自転車処分簡易化制度と自転車リユースの制度を稼働させたかったのですが、できませんでした。見通しが甘く、法的な問題に気づかないまま動いていたのが、主な原因です。本企画は失敗ということになると思います。

しかしながら、盛岡東警察署生活安全課さんとのつながりや自転車に関する知識を得たり、放置自転車回収の際の動きを体感できたりしたことは無駄ではなかったと思います。私たちはこれを活かし、新しく放置自転車対策の企画を立てたいと考えています。

５．今後の活動予定

今後は、自転車処分簡易化制度とリユース自転車の貸し出し制度の案を作り、大学当局に提案し、大学の取り組みとして採用してもらう形で放置自転車の減少に寄与していきます。また、私たちの団体の立ち位置は、制度稼働後に運用の一部を担い、また制度自体の改善提案を行うようなサークルになる見込みです。

＜活動の写真＞

4